With a princess the Cohabitation life
お姫さまと
いっしょ
ときどき同棲ライフ
小説 山本沙姫
挿絵 ga015
立ち読み版

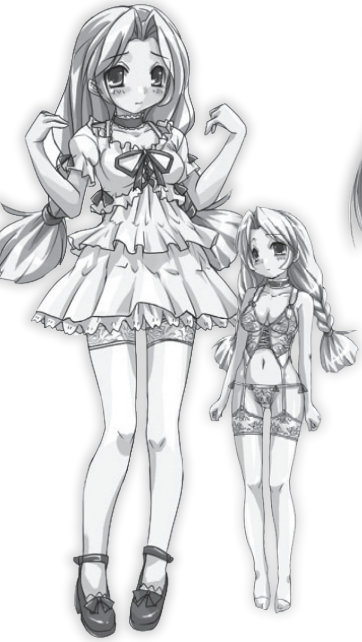
第一章　お姫さま、アキバに立つ！　006
第二章　お姫さま、アパートに来る　038
第三章　お姫さま、料理をする　073
第四章　お姫さま、遊園地へ行く　105
第五章　お姫さま、観覧車に乗る　137
第六章　お姫さま、パレードに参加する　166
第七章　お姫さま、対決する　184
第八章　お姫さま、愛する人と暮らし続ける　229

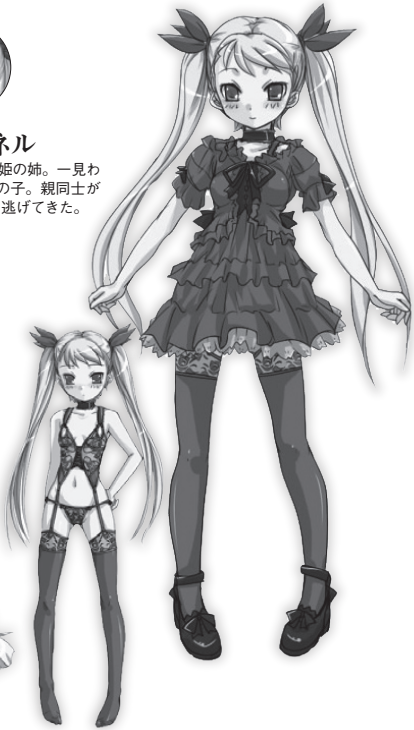
登場人物紹介

Characters

ヴァネッサ＝ライオネル

「ティリグ王国」の二卵性双子の姫の姉。一見わがままだが、実は心の優しい女の子。親同士が決めた結婚をさせられそうになり逃げてきた。





遠藤（えんどう） 克己（かつみ）

一見頼りないが、困った人を見ると放っておけないお人好し少年。ライオネル姉妹と同棲することに。

シェリル＝ライオネル

ヴァネッサの双子の妹。おとなしく、人見知りもするが、好きになったら大胆な一面も。小さい頃によく遊んだ克己に想いを寄せている。

ジョセフ＝ハートランド

姉妹に仕える執事で、お目付役としてやって来た。大の時代劇オタクで、妙なサムライ言葉で喋る。

第二章　お姫様、アパートに来る

「だっ、大丈夫ですか？　克己さん……」
「もーっ、何やってるのよ！　ドジねぇ」
すると暗闇の中、耳に届くのは自分の事を気遣ってくれる天使の囁きと、逆に蔑む小悪魔の呟き。思わず目を開けば、見上げるそこに桃源郷が。
「！」
左右の肩口を跨いで立ち、見下ろしてくる一糸纏わぬお姫さま達。ちょうど視線の先に、真っ先に飛び込んできたのが、水気を含んでキラキラと輝く金銀の柔毛に覆われたヴィーナスの丘とあっては、心中穏やかでいられるわけがない。
「わぁっ！　だっ、大丈夫。大丈夫、だよ！」
その姿を目に焼き付ける暇もなく、ドタバタと慌ただしく起き上がると克己は浴槽脇の操作パネルに飛び付く。そして震える指先でボタンを押して、どうにか点火に成功した。
ザザザー……。
「さっ、ここ、これでOK。じゃ、ご、ごゆっくり、どうぞ……」
温度を調節し終えると、彼は裸を見てしまった後ろめたさのあまり、つい下手に出るような口調で話しかけてしまいながら、そそくさと出ていこうとする。
「お待ちなさい、克己。まさかそのまま、出ていくつもりじゃないわよね？」
ところが脱衣所に入る寸前、ヴァネッサにガッチリと捕まってしまった。肩を押さえて

強引に振り向かせてくる小さな手には思いのほか力が込められていて離れる事ができない。
「えっ⁉」
「えっ、じゃないわよ。あなた私の下僕なんだから、ちゃんと身体を洗っていきなさい！」
突然の出来事にまたまた腰を抜かしそうになる克己に、彼女はまるで王家の侍女にでも命じるように偉そうな口調で言い放つ。
「か、身体……だっ、ダメダメそんなの！　何言ってるんだよ⁉」
とんでもない命令を下すわがまま姫に驚かされ、下僕少年は思わず素っ頓狂な声を上げる。無論、驚いたのは彼だけではない。
「そ、そうよお姉ちゃん。克己さんは未来のわたくしの旦那さま。お姉ちゃんにとっては弟になる人なんだから、そんな侍女の仕事みたいな事させないで」
姉の背後に回りこみ、両肩を掴んで引き離そうとしながらシェリルは愛しい人を困らせる彼女に抗議する。どうやらライオネル王家の人間にとっては、自分の身体を洗う事すら従者にやらせる物らしい。
「いいじゃない、別に。あ、そうだ！　シェリルも一緒に洗わせなさいよ。もう何度も洗いっこした間柄なんだし……ねっ、遠慮する事ないから……」
しかしヴァネッサは二人の話をろくに聞き入れないばかりか、さらに突拍子もない事を言い出す。

「いや、そんな昔の事言い出されても……」
「でも……言われてみればわたくし、自分ではどう洗っていいかわかりませんし、お姉ちゃんより、克己さんの方が気持ちよさそうですから……やっぱり、お願いします」
何とか拒もうとする克己の言葉を遮り、おずおずと姉の言葉に納得してしまったシェリルまでもが、丁寧にお辞儀しながらお願いしてきた。
「シェリルちゃんまで、そんな……いや、だからダメだって」
「どうしても嫌だと言うのね？　なら、ジョセフに助けてもらおうかしら？　キャー、克己に襲われるー、なんて言って隣に駆け込んで……」
いつまでたっても命令を聞かない下僕少年に業を煮やし、ヴァネッサは最終手段に打って出た。
「ちょっ、ちょっと何言って……」
ニヤニヤと意地悪な笑みを浮かべて脅してくるわがまま姫さまの言葉に動揺して、克己は慌てて居間の方に視線を向ける。
『よく来たなドラゴン丸。今日こそ引導を渡してくれるわ！』
「おお、よく見れば好敵手役は橋川伝三郎（はしかわでんさぶろう）ではないか！　若いのお。それでいてこの迫力、さすが天才悪役でござる」
風呂場からは見えないが、彼はこちらの騒ぎに気付かずまだテレビに釘付けになってい

る様子。しかしいくら何でも目の前に裸のお姫さまが助けを求めてきたら、時代劇鑑賞どころではないはず。
どんなに弁解しようとも、愛用の木刀で一撃食らわされるどころではすまない。
「わ、わかったよ……でも、ホントに、ホントに、いいんだね……」
「いいからさっさとしなさい！」
渋々わがまま姫さまの命令を聞き入れた克己は、おぼつかない手つきで傍らに置かれたボディソープのボトルとスポンジを手にとる。
「ちょっと！　そんな無粋な物で私達の美しい身体を洗うつもり⁉　ソープはともかく、ちゃんと素手で洗いなさいよね！　それが王家のしきたりなんだから」
「素手って……そんな……」
できるわけない、と言いかけたところで慌てて口を閉ざす。ヘタに機嫌を損ねてジョセフの下へ駆け込まれてはたまらない。
（と、とんでもない事になってきちゃった……）
わがまま姫の命令に戸惑い、ますます混乱していく彼の事に構わず、ヴァネッサはタイルの床に小振りなヒップをペタンと下ろし、膝を抱えて下僕少年の奉仕を待つ。
「さあ、早くはじめなさい。それから一応言っておくけど、下僕の分際で私に変な気を起こしたら、承知しないからね……」

こちらを振り返り、イタズラっぽい視線を送りつつ、からかうような口調で釘を刺して。

ペシッ！

「よ、よろしく……お願いします、克己さん。その……洗うだけに、してくださいね……だって……今はまだ、つ、妻になる前、なんですから……」

大きな桃尻で餅つきのように粘り気のある打撃音を響かせて、シェリルもいわゆる体育座りの姿勢で姉の横にピッタリと寄り添う。振り返ってこちらを見つめてくる、目尻の下がった弱々しい表情と、モジモジした可愛らしい喋りに男心が激しくくすぐられた。

邪な思いに、股間がジリジリとむず痒くなっていくほどに。

「あ、ああ……それじゃ……」

気後れしつつも手の平にたっぷりとボディソープを注ぎ、二人の背後にしゃがみ込む。目の前に広がる、美少女達の包み隠さぬ背中。ほんのりと桃色に染まったきめの細かい肌と、軽く前屈みになっている事で描かれるなだらかなカーブが美しく、そして艶かしい。

さらに、肩の後ろにくっきりと浮き出た窪み、俗にいう天使の羽根が目を引く。まるでここから本当に純白の翼が生えて、宙に舞うかと思えるほどの神々しさが感じられた。ただ座っているだけでこれほどの気品を感じさせるのは、彼女達の境遇のせいに違いない。

（……二人とも、大人のお姫さまになったって事なんだよなぁ……）

無邪気に背中を流しあっていた頃とはまるで違う後ろ姿に、今こうして真後ろにいても、

届かない隔たりがあるように思えてきて、手を伸ばす事ができない。
「ちょっと！　いつまで待たせる気なのよ！」
「あのー、早くしてくださらないと、カゼをひいてしまいますわ……」
踏ん切りがつかない気弱な少年の背を押すように、お姫さま達は相次いで急かしてきた。
さすがにこのままいつまでも放ってはおけない。
（……身体を洗ってあげるだけだよ。何もやましい事なんてないって。よし……）
意を決した克己は固く目を閉ざし、ソープまみれの手の平をお姫さま達のなだらかなうなじに押し付けた。
ピチョッ！
「んっ！」
「はんっ！」
冷たいソープ液が肌に触れた瞬間、電気ショックでも受けたかのように可憐な身体がピクンと跳ね上がる。微かに色艶を帯びた悲鳴とあいまって、抑えつける決心をしたばかりのやましい思いが、早くも崩れかけた。
「あっ！　ご、ごめん……」
「もう、また謝ってる！　別にいいから、ちゃんと洗いなさい！」
「ごめんなさい。ちょっと驚いただけですから、気にせず洗ってくださいまし……」

慌てて引きかけた手を掴み、ヴァネッサとシェリルは続きを要求してくる。目を閉じていても、声だけでわがまま姫の目尻の吊り上がった不満顔と、おっとりお姫さまのウルウルとした目付きの困り顔が見える気がした。

「う、うん……じゃあ、こんな感じでいい、のかな？」

興奮のあまりカラカラに渇いた喉を震わせて呼びかけてから、克己はゆっくりと、そして丁寧に柔肌の表面を撫で回す。うなじから腰の辺りまで上下に滑らせたり、背骨の中心から渦を描くように回したりと、満遍なく丁寧に白い粘液が塗り広げられていく。

ねちゅっ、ねちゅっ、みちょみちゅみちゅむちゅ……。

「ふぅっ……」

「あっ、はぅんっ！　いい、ですわぁ……」

狭い風呂場の中に響く湿っぽい水音に合わせて、乙女の白い肉体がヒクヒクと震える。

（……こんなに柔らかいんだ。女の子の身体って……）

湿った手の平に吸い付いてくる、ゼリーのような柔肌。その心地いい感触に、克己は理性という名の心の枷が徐々に壊れかけてくるのを感じた。胸の鼓動が祭太鼓の乱打のように高鳴り、熱く沸騰した血液を股間へどんどんと送り込んでいく。

（いけない！　このままじゃ……）

迂闊に勃起させて彼女達に、とりわけヴァネッサに気付かれれば大変な事になりかねな

い。頭をブンブン回して邪な気持ちを懸命に振り払い、ただお姫さま達をきれいにしてあげる事だけに意識を集中させようとする。
しかしそんな思いを打ち壊すような、強烈なトラップが発動しはじめた。
ピュペタペタペチュ……。
「そ、そうよ……克己……そんな感じで、丁寧に……んっ……」
「はぁっ、いいですわぁ……克己さん、すごく、上手……ですわぁ……」
粘音に混じって聞こえてくる、美少女二人の甘い声が耳をくすぐる。途切れ途切れの気だるい喋りが、オタク少年の妄想を激しくかき立ててしまう。どうにもエロゲーの濡れ場でのセリフを髣髴とさせて仕方がない。
（ま、まずい……）
いくら平静を保とうとしても、男の肉欲は抑える事など不可能。充血した股間の一物が熱く大きく膨らみ、ズボンの中でムクムクと鎌首を掲げたコブラのように立ち上がっていく。
「もう、後ろばかりじゃなくて、ちゃんと前の方も洗いなさいよね！」
ぼやける耳に、気丈なお姫さまから度肝を抜くような次なる命令が聞こえてきた。
「ま、前って……」
「その……胸とか、お腹とか……」

戸惑いながら問いかける克己に、シェリルが吐息まじりのたどたどしい口調で答える。
「む、胸って……いゃ、さすがにそれは……」
危険な色艶を含んだお願いに、我が耳を疑う気弱な少年は舌を噛みそうになりながら、擦れた声で聞き返す。そんな彼の混乱ぶりを気にもせず、二人は洗いやすくするために揃って背筋を伸ばし、両手を前に上げる。
「あーもう！　ウダウダ言っていないでさっさと続けなさいっ！　でないとジョセフに言いつけるわよ！」
「はっ、はぃぃぃー、ただいま……」
再び侍執事の名前で脅されて、まるで条件反射のように畏まった克己は裏返った声で呼びかけると、お椀状に曲げた手の平になみなみとボディソープを注ぎ足す。そして二人の腋の下から手を伸ばし、揃って抱き抱えるようにお腹に手を当てた。
ぺちゅっ！
「ひふぅっ！　もっ、もっと優しくしなさいよね」
ぴとっ！
「みみゃはぁんっ！　か、克己さぁん。ちょっと、くすぐったいですわぁ……」
今まで触れてきた他の部位より感度がいいらしく、手の平を当てた途端に返ってきた反応がより鋭い気がした。

（……他のところより、ず、随分とデリケートなんだな。気をつけなくちゃ……）
手の平に広がる乙女の肌の感触に戸惑いながらも、心優しい少年はうっかり傷をつけないように注意しながら、ゆっくりとソープ液を塗り広げていく。爪が当たらないように、指先を皮膚に食い込ませないようにして。
ぺちゃぺちゃぺちゃ……。
二つの手の平に伝わってくるお姫さま姉妹のお腹の肉の感触は、背中を触れる時に感じた物よりはるかにプルプルと柔らかく、まるで生暖かいプリンを素手で撫で回しているかのよう。体格の違いのせいか、特にシェリルの方がより柔らかい気がした。
（すごい、触るだけでこんなに気持ちいいなんて……あ！）
一糸纏わぬ少女の肉体を撫で回す心地よさに引きずられ、手の動きがどんどん早くなってくる。
クリュルッ！
その時、ヴァネッサの身体を撫で回す手の親指が、小さな窪みにはまるのを感じ取った。
（……こ、ここって……お臍、だよな……）
視界を封じていても、いつも自分のを洗っているだけに感触ですぐにわかる。
（ここは、特に丁寧に洗わないと……）
これまで以上に注意を払いながら、克己は親指の腹で優しく撫でるように、縦割れの小

さな臍の中を磨き清めていく。縁の部分のプルプルとした感触が気持ちいい。
「んっ、なっ、なかなかうまいじゃない。そうよ、そんな感じで、もっと……んっ！」
洗われるヴァネッサ本人もお腹の中心を弄られるのに快感を覚えている様子。なだらかな両肩をピクピク震わせて喘ぐ姿に劣情心を激しくかき立てられて、思わず手に力が入る。釣られてシェリルの身体を洗う側の手も、柔肌の上をより大きく這わせていくようになっていった。
ピチッ！
するとその指先が、今度は何やら柔らかい物に挟まれる。
（ここって？　どこだろう？　溝みたいだけど……）
彼の手が滑り込んだのは、太腿の付け根の辺りの部分。膝を抱えて大きく曲げているせいで、キュッと切れ上がった小股に秘所を髣髴とさせる深い溝ができていた。
「ひぅっ！　か、つみさぁん。くすぐったいですわぁ……」
最も敏感な部位に程近いところを触られる感覚に、つい漏れる甘ったるい吐息まじりの喘ぎ声が彼の興奮にさらなる輪をかけた。
むちゅむちょ、ねちょねちょ……。
風呂場の外まで聞こえそうなほど粘音を奏でさせるぐらいに、自然と柔肌を捏ね回す両手に力が入り動きを早く大きくしていく。

だが、それでも無意識のうちにかろうじて理性が働き、直にバストへ触れる事はできなかった。摩擦と興奮で火照った手の平は、下腹部から下乳ギリギリの所までを行ったりきたり。

「まっ、まだぁ？　お……お腹ばっかりで、胸がお留守になっているわよ……」

「んっ、そ、そうですわぁ。克己さぁん……こちらも、洗ってくださいましぃ……」

なかなか先に進まない彼にじれったくなったお姫さま達は、両手を掴んで強引に左胸へ引き寄せる。

ムチュッ！

プリュッッッ……。

「はうっ、こ、ここは……」

粘液まみれの手の平に、マシュマロのようにフワフワとした乳房が吸い付いてきた。片手にすっぽりと収まる微乳と、両手でも零れ落ちそうに思えるぐらい大きく張り出した巨乳。いずれ劣らぬ魅力に満ちたお姫さまの肉体の感触に、心の箍が弾け飛んだ。

むにゅむにゅむにゅ……。

くにくにくりょくりゅ……。

（こ、これがシェリルちゃんとヴァネッサのおっぱい……）

粘土細工に興じる子供のように、無我夢中で二人の胸を揉み続けていく。指がめり込み

そうなほど柔らかなシェリルの乳房は特に揉みごたえがあり、自然と手の平に力が込められてくる。爪を立てない程度に。

しかし揉みくちゃにしていくうちに、ただ柔らかいだけでなく固くしこっている部分があるのに気付く。時折、指の間に挟まる薄紅色の乳首が勃起していた。

「あんっ、じ、上手ですわ……克己さん。でも、もっとしっかり……揉んでくださいます？」

半開きの口から、桃色の吐息まじりに出されるたどたどしいお願いが、気弱なオタク少年の劣情心を激しくかき立てる。

（……シェリルちゃん、もしかして、感じてるの⁉）

普段はおとなしい彼女がもらす、大胆かつ色っぽい声に引きずられて、彼は積極的にお姫さま達の美しい肉体を弄るようになっていった。グチュグチュヌルヌルという粘液の奏でる音が、まるで彼の心情を反映しているかのように淫靡な響きを纏っていく。

「ちょっと！　きつく掴みすぎっ！　もっと力を抜きなさいっ‼」

興奮しすぎたあまり、克己はついうっかりしてヴァネッサの小振りなバストを握りつぶしてしまいそうなぐらいに、強く掴んでしまう。

「えっ、あ、ご、ごめ……んっ！」

ヌルリッ！　ジュッ……。

彼女の叱責に焦った彼は両手を滑らせ、姫さま達の身体に二人羽織のように覆いかぶさ

る。その勢いで、手先が彼女達の股間にまで伸びた。清らかな秘肉の丘を二つに分けるクレヴァスに、中指を軽く食い込ませる形で。

「きゃぁんっ！　かっ、克己さぁん！」

「はうっ、こ、こら……」

左右の耳から、ステレオのようにお姫さま達の戸惑う声が突き刺さる。

（こ、ここって……）

時間ごと凍りついたように動けなくなった両手に伝わってくる、一瞬見ただけではわからなかったお姫さま姉妹の秘所の感触。二卵性という事で双子でありながら体格の違う二人は、当然秘所の発育具合にも差が出ていた。

左手で触れるヴァネッサの乙女の丘は陰毛が薄く、プニプニと柔らかな肉の触感がはっきりと伝わってくる。さらに中指の第二関節辺りには、何やらコリコリとした固い物が当たる感触があった。

（こ、ここって……もしかして、クリ……）

陰裂の外まで僅かに起立してきた、秘肉の豆粒。女体の最も敏感で、最も神聖な部位に触れてしまった事に、純情な少年の心は激しく震える。

「くふっ、そ、そこは……」

強気な彼女にしては珍しい、鈴虫の音のように儚い呟きが邪な思いを更に燃え立たせた。

第五章　お姫様、観覧車に乗る

そして両足をM字型に開き、股の間に下腹部を挟み込む。

（……ヴァネッサって、こんなに軽いんだ……）

華奢なお姫さまの身体は、まるで真綿の固まりでも持っているかと思うほどしか重さを感じられず、柔らかな質感もよく似ている。そして重なり合う胸板から、ドキドキと激しく脈打つ鼓動が伝わってきた。

「すごく……ドキドキしてるね……」

釣られて自身の心臓も激しく高鳴る克己は、思わず擦れた声で呼びかける。

「……こんなに広げられちゃうなんて、ちょっと恥ずかしくて……」

首に手を回してきながら、頬を朱に染めて視線を逸らして答える可憐なお姫さま。愛しい人と結ばれる喜びと、待ち受ける初めての痛みへの怯えが入り混じった、少し憂いを帯びた笑顔が実に可愛らしい。そのすべてを手に入れたい、わがままな欲望が胸からあふれ出そうなほど吹き上がっていく。

もう、自分を抑えられない。

「いくよ、ヴァネッサ……」

柔らかな頬に自分の頬を押し付けて、耳元で優しく囁くと彼女は無言でコクンと頷いた。

「んっ……」

くちゅっ！

両手の力を少し緩め、華奢なお姫さまの身体をゆっくりと下ろすとカチカチにいきり立った肉柱の先端が、閉ざされた肉のスリットに当たる。

「くうっ、あっ、あれ？　いよっ……ふんっ……」

「ど、どうしたのぉ？」

しかしそこから先へ進むべく、両手を引きつけて彼女の幼い蕾を押し開こうしてもなかなかうまくいかない。互いに粘液にまみれた秘所は、まるで油でも塗ったかのようにツルツル。おまけにシェリルの時と違い、立ったままという不安定な姿勢が、より二人の愛の結合の妨げとなってしまう。

ペシャ、シュリュシュリュ……。

濡れた陰毛を撫で回す、リンゴの皮を剥くような湿っぽい音がオルゴールの音色をかき消すほど響き渡る。

「やあんっ！　そんなスリスリして、焦らさないでよぉ！」

ゴンッ！　ゴゴゴゴ……。

股間をくすぐられるむず痒さに耐え切れず、ヴァネッサが金切り声を上げるのと同時に、奇妙な金属音と共に再び回転が始まった。最上部にいたゴンドラは、少しずつ降下していく。

「えぇっ！　うっ、動いたぁ!!?」

「きゃぁんっ！　ゆっ、揺れてるぅぅぅー」
突然の衝撃に驚き、素っ頓狂な声を上げてしまう克己に、ヴァネッサは思わず手足に力を込めて、大木にしがみ付くコアラのように思いっきり抱きついた。股間同士を強く引きつけあう形で。
ぶずっ！　ずぶずぶずぶずぶっっっっ……。
「くうっ、こ、これは……あぅっ！」
その瞬間、なかなか的を射られなかった極太の肉矢が、乙女の秘割れを押し開く。大きく開いた亀頭のエラまでが、お姫さまの肉穴の中へ、軽く食い込んだ。
「ひっ、ひゃぁ――――んっっっ！」
股間を貫く衝撃的な異物感に、華奢な身体がビクンと跳ね上がる。
「あっ、ご、ごめん……大丈夫？」
内股を伝い落ちていく初めての証を目にして、克己は思わず両腕に渾身の力を込めて、己が分身の侵入を食い止めた。このままいけば、彼女に多大な負担をかけてしまう。
しかし内心では、敏感な表皮に纏わり付く強烈な締め付けと粘液まみれの肉襞がもたらすヌルヌル感。それに火がつきそうなほどの熱さが気持ちよく、さらに先に進みたくてウズウズしている。
「平気よ、これぐらい。ここで引き下がったりなんかしたら、シェリルに笑われるわ……」

身を引き裂くほどの激痛に耐え、気丈なお姫さまは健気に微笑んでみせた。何があっても、思いを寄せる人と結ばれたい決意が、克己の迷いを振り払う。

「……続けるよ。痛く、しないからね……」

はやる心を抑え、優しく囁きかけると両手をゆっくりと上下に動かし、突き立てた一物を少しずつ慣らさせるように肉壷の中をまさぐりはじめる。

ずりゅっ！　ずっずりっずりゅりゅりゅっっっっっ……。

「あっ、あんっあんっあんっ！　そうっ、もっと、もっと……」

「すっ、すごい、すごいよ……俺、飲み込まれそう……」

未熟な産道の中を、パンパンに張り詰めた肉棒が乙女の花園の奥底目指して潜り込んでいく。その先端から根元へ向けて、熱く湿った肉のヴェールの感触が少しずつ降りてきた。

「き、気持ち……いい。キミの中……んんっっっ……」

汗ばむ顎を反らし、擦れた声で呼びかけながら克己はより強く深く、彼女のヴァギナの感触を得たい思いで、小さな体躯を揺り動かす。真っ直ぐに上げ下げするだけでなく、小さなヒップを小刻みに左右に振ったり、膝を屈伸させて突き上げる勢いを増したり。

思いつく限りの動きを駆使して、発育途上の肉壷の中すべてを堪能していく。

ぐちゃ！　ぐっちゃぐちゅぐっちゅ……。

「あぁっ、す、すごいよ……ヴァネッサの、ここ……ギュッとして……ぬるぬるって、し

てて……んっ、くぅっ！」
　密閉されたゴンドラの中に、甘酸っぱい愛液と汗の匂いが充満していき、擦れあう秘肉の淫音が、徐々に大きくなってきた。下で見守る野次馬にまで聞こえるかと思えるほどに。
「わっ、私もぉぉ――、私も、おま〇こ、克己の……うんっ、おっ、おっきぃ……んっ、あぅんっ、オチン……チンで、ぐりぐり、こりこりされて……あっ、あんっ！　溶けちゃうぅ――んっっっ！」
　一国の姫が口にするとは思えないふしだらな言葉を叫びながら、ヴァネッサは太腿をキュッと締めて激しく腰をくねらせる。弾みでパタパタとめくれるスカートから顔を覗かせる小さなヒップが窓ガラスに映り、誘うように揺れるのが見て取れた。
　李（すもも）のような可愛らしい双曲を覆う、黒いアダルトチックな下着というアンバランスさが生み出す魅惑的な姿に、自然と手はショーツの隙間へと引き寄せられる。
　くにゅっ、くにくにくにゅっ……。
「ああ……ヴァネッサのお尻……プリプリしてて、いいよ。気持ち……いい……」
「ひゃあんっ！　くっ、くすぐったいよぉ！」
　手の平に感じ取る、空気の抜けたゴム鞠を握るような柔らかな感触の気持ちよさに思わず指先を捏ね回せば、柔らかな表皮に走るくすぐったさに悶えるヴァネッサは、咄嗟に肛門をギュッと引き締める。

「う、うわっ！　き……つい……そ、それに……こんなに、ブルブルして……んんっ！」
「あんっ！　か……克己の、ここ……すごく、ぴくぴくしてるぅ……」
釣られて膣口も狭まって、突き立てた男根を力強く握りしめた。より深く密着する秘肉同士が、表皮を通じて互いの興奮を伝え合う。
「んっ、んくっ、すっ、好き……克己。好き、大好きっ、んっ……」
くちゅっ、くぷくりゅくちゅりゅりゅっ……。
感極まった彼女は再び唇に吸い付いてくる。腰のくねりに釣られるように、さっきの濃厚な口付けよりさらに激しくなった動きの舌が、口腔内を駆け巡る。口元と股間に強烈な電撃が走り、克己の一物はもう爆発寸前。
「んっ、はぅっ！」
ズルッ！　ドタッ！
不意打ちに焦った彼はバランスを崩し、足を滑らせて床に尻餅をつく。その時、不意に目に入った外の光景から、地上にかなり近づいているのに気付いた。
「まっ、まずい……このままじゃ……」
慌てて幼膣に突き立てた一物を引き抜くべく、克己はヴァネッサの太腿を下から抱えて、小さな身体を押し上げようとする。
ジュブブブ……ギチュッ！

第八章　お姫さま、愛する人と暮らし続ける

ジョセフの旅立ちからはや三日、克己のバイト休みは未だに続いていた。その間、あの失踪した皇太子の行方については連日テレビなどで報道されているものの、婚約者候補であるはずのお姫さま姉妹については、まったく話題に上らない。

どうやら有能な執事が、旅先から情報漏えい防止策を母国の諜報部に指揮している様子。

「……ちゃんと食べてる？　インスタントとかコンビニのお弁当ばかりじゃだめよ。それから夜更かしは絶対にしない事。何かそっちじゃあんた好みのアニメを真夜中にいっぱいやってるみたいだし、見るなら録画して後で見なさい、わかった？　それから……」

手にした携帯電話の向こうから、聞こえてくるのは久々に聞く母の声。爆竹が弾けるように次々と飛び出してくる、五月蠅（うるさ）いけど温かみのある小言が耳に心地いい。

「うっ、うんっ……わかって、るっ、よぅっ！　んくっ……」

矢継ぎ早に喋り続ける気丈な母に、気後れする克己の態度はどことなくぎこちない。奥歯に何か物が挟まったような、はっきりしないモゴモゴとした口から出るのは、苦しげな吐息まじりの声。

「それからね、それから……たまには帰ってきてほしいんだけどねぇ……あっ、人手が足りないだけよ。それだけ……」
一通りのお説教を終えると、彼女は打って変わってしんみりとした口調で、離れ離れの息子恋しい胸の内を語ってくる。姿は見えなくても、声を聞くだけで寂しげな顔が目に浮かぶ。
「……ごめん母さ……んっ！　夏休みでも、んんっ、べ、勉強とかバイトで、忙しくてね……んんっ……」
希望に応えられない自分が心の底から申し訳なく、克己は思わず得意先に謝るサラリーマンのように頭をペコペコと下げる。
「そう……それじゃ仕方ないわね。ところで、さっきから何かヘンな声出しているけど、どこか具合でも悪いの？」
「そ、そんなことないよ。じゃあ、そろそろ……バイトに行くから、また電話するね」
ピッ！
鋭い追及から逃れるように、彼は慌てて電話を切った。
「ふふふっ、勉強とアルバイトで忙しいですって？」
「そんな事言って、実は……女の子二人にこんな事させているなんて、親不孝な方ですわぁ……」

母との会話を邪魔していた張本人達が、イタズラっぽい笑みを浮かべて話しかけてくる。ベッドに腰掛ける克己の左右から膝立ちの姿勢で下腹部に寄り添い、剥き出しの男根を指先で軽くトントンと小突きながら。

（……親不孝、か……）

たとえジョークでも、心の片隅が少しは痛む。実家の事が気にならないわけがないから。とはいえ、今はもっと大事にしたいものがあるのだから、とても帰る気にはなれない。我ながらわがままになったと思いつつも。

「誰が、そうさせたのかなぁ～？」

ニヤニヤと意地悪な笑みを浮かべると、克己は迷いを振り払うようにじゃれつく子猫達の頭を優しく撫でる。そして背中に手を回して、ビクビクと痙攣するペニスに顔を押し付ける形で、二人の身体をグッと引き寄せた。

「んっ……」

「かっ、克己さぁん……」

するとすかさずヴァネッサは亀頭のエラ下を、シェリルは付け根の部分をそれぞれしなやかな指でギュッと掴み、愛のご奉仕を再開する。

ちゅるっ……ぴちょっ……ぴゅるっちゅるっ……。

「んふっ、んっんっんっ、克己さんのオチン、チン……美味しいですわぁ……」

ぽっちゃり顔のおさげ姫が、柔らかな頬を震わせながら舌全体で包み込むようにそそり立つ肉柱を裏筋に沿って、じっくりゆったりと舐め責める。皮下の神経にじわじわと染み込む、乙女の柔肉がもたらす生温かい刺激がくすぐったい。

ペシャペシャペシャペシャ……。

「はふぅんっ！　それに固くて太くて、す、素敵ぃ……」

対して活発なわがまま姫はキュッと絞った舌先を亀頭の天辺に当てて、素早くウネウネとくねらせて鈴口の表面を激しく擦る。割れ目の外側から尿道を通って下腹部にまで、ヘチマのたわしで擦られるような心地いい痺れが幾本も駆け抜けた。

「うんっ、ふ、二人とも……すごく上手く、なったね……」

「ホント？　ホントに？」

「嬉しいですぅ。もっともっと、気持ちよくしてあげますわぁ～」

汗ばむ喉を震わせて、克己はたどたどしく呼びかける。彼のお褒めの言葉に感激して、シェリルが嬉々としてドレスの胸元を開きはじめた。そして姉の手から強引に愛しい人の肉棒を奪い取り、火照って桃色に染まった乳房の谷間へ挟み込む。

メチュッ！

「うっ！　こ、これは……」

湿った乙女の柔肌が、ペタペタと貼りつく感触に包み込まれる固くいきり立った男のシ

ンボル。張り詰めた表皮を溶かしてしまいそうなぐらいの熱さが走り、思わず全身がゾクゾクと震える。
「あっ！　何するのよ！　独り占めはダメなんだからね」
「うふふっ、そんなのわたくしの勝手ですわ」
目尻をキッと吊り上げて金切り声を上げるヴァネッサをからかって軽く含み笑いをすると、シェリルは両手で巨乳を左右から押さえつけ、下から上に押し上げる。同時に谷間の上端から顔を覗かせる、熟したイチゴのように真っ赤な亀頭に舌を這わせはじめた。
にっちゅにちゃにちゅにちゅ……。
「どっ、どう……克己さぁんっ、んっんっ、ぺちゅっろれっ、わたくしの……奉仕は……」
脈打つ肉柱の胴がプリプリのゼリーに似た触感の柔肌で揉み扱かれ、先端にはエラまわりに沿って粘液まみれの舌が糸を引いてヌラヌラと這い回る。さらに呼びかけるたびに先端へ吐きかけられる生温かい吐息が、先割れから入り込み破裂寸前のペニスを内側から撫で回す。
「いい、いいよぉ、シェリルちゃん。そこ……んっ！」
上下同時に責め立てられて、極限まで膨らんだ肉砲はもはやいつ発射してもおかしくない。しかしまだまだ、このジュクジュクと痺れる感触を味わいたくて、克己は股間に力を込めてみずから射精を封じ続けた。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/

ATOMIC POCKET NOVELS NEW RELEASE

あとみっく文庫最新刊

ちょっと大人のライトノベル／毎月下旬ぞくぞく刊行中!! 定価／690円（税込）

魔海少女ルルイエ・ルル2

【小説：羽沢向／挿絵：ピエール☆よしお】

全国書店で 好評 発売中

クトゥルフの娘たちが学園祭でメイドさんに変身!?

ルルたちに新たな邪神が這い寄る!

女幹部メル様のセカイ征服計画！

【小説：高岡智空／挿絵：鈴眼依縫】

全国書店で 好評 発売中

少年（カノジョ）に封じられた魔神降臨（とき）の刻!

玲音と冬馬・交差する2人の物語、衝撃（クライマックス）の最終章へ!

思春期なアダム3 ―人泣きの子猫

【小説：さかき傘／挿絵：天海雪乃】

全国書店で 好評 発売中

お腹の子供のパパを探してます!!

ポテ腹魔法少女が父親探しにひたすらH!

既刊LINEUP

全国書店で好評発売中

- 仙獣学園戦姫ノブナガ! ①〜③
- BLANGEL 輪になりて踊る愚者の夜
- 不死の吸血鬼がFSのご主人様を募集しているようです
- 現春期なアダム ①〜③
- 呪詛暗らい師【カースイーター】
- 女幹部メル様のセカイ征服計画!
- 借金お嬢クリス ①〜③
- 無敵の姫騎士がMMCに目覚めたようです
- 宇宙海賊学園ブラックキャット

KTC 発行◎株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル TEL:03-3555-3431（販売）FAX:03-3551-1208

▶最新情報は公式サイトへ！ あとみっく文庫 検索

キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

http://ktcom.jp/

◎雑誌、コミック、小説の**通信販売**もやってるよ!
◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルの**バックナンバー**も買えるよ!
◎**ジャンル別**で作品も選べて超便利!
◎二次元編集部の愉快な**Blog**も更新中!

KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!